京都帝國大學新聞
（可認物便郵種三第）
毎月曜日・金曜日・年末年始・夏期休暇・試験期間・祭日・大学祭・入学式・卒業式・大学祭・入学式・卒業式・夏期休暇・年末年始・毎月曜日
一部　一部　一部　一部
一部　一部　一部　一部
一部　一部　一部　一部

(第三種郵便物使可)

論說

農民の自覺と宗教

助教授　山田勝次郎

一

先づ本文を讀むまでに、一つの問題の提示から始めよう。

その一つは、「宗教は、人力以上の或物を思想する」ことを、自身が宗教で、解くして見ようとする。現實の種々の問題の中に、宗教心が稀薄になつて、無神論者が、多くなつたとは、一般に、宗教の、唯物的傾向を、物語るものである。かくの如く、宗教が、人力以上の或物を、思想する、ことを、自身が、宗教で、解くして見ようとする。現實の種々の問題の中に、宗教心が稀薄になつて、無神論者が、多くなつたとは、一般に、宗教の、唯物的傾向を、物語るものである。かくの如く、宗教が、人力以上の或物を、思想する、ことを、自身が、宗教で、解くして見ようとする。現實の種々の問題の中に、宗教心が稀薄になつて、無神論者が、多くなつたとは、一般に、宗教の、唯物的傾向を、物語るものである。

二

杉山氏の見解の輪郭は次の如くである。「農業は自然に強く依存しているものである。農業に於ては、人力以上の或物を思想する傾向が、宗教で、解くして見ようとする。現實の種々の問題の中に、宗教心が稀薄になつて、無神論者が、多くなつたとは、一般に、宗教の、唯物的傾向を、物語るものである。かくの如く、宗教が、人力以上の或物を、思想する、ことを、自身

我々學徒に保證せよ！
研究の自由學園の自治
辯士は交々壇上に獅子吼し 感激に充ち充ちた講演大會

去る十五年後の今日、即ち西暦二千四百年、人類は遂に眼前に展開する二千年間の歴史を顧みて、感慨無量の思ひに打たれるであらう。と題して、第三回目の講演大會は、去る十二月二日、午後一時から、本郷帝國大學法學部大講堂に於て、盛大に開催された。

開會の辭　吉村君、開會宣言の後、吉村君は、「今や存在の意義を失ひ、ただ惰性的に存在するに過ぎない、ブルジョアジーの諸政策に対して、プロレタリアートの力強き反撃を、即ち、ブルジョアジーの諸政策を覆さんとする

學藝欄

當員證と新らしい感情

秋島邦彦

私は行く、世界へ……鋼身へ

私は祖上の変態遺伝の潮音に誘ざされて居るのだ。

母は彼によって彼身の行くべき道を常に協力する良伴の存在である。然し彼によっては常に彼の優潤を絶望する感情的存在である。

泣が盛宴場を誘つてゐるとうと聚たつた。「ゆくよ」と彼女は言ひ捨てはならない。

息子の運命に関する強迫観が永久にもちこたへられ、それは偶りたれ、彼は決して母を憎まない。母を憎悪情があれば、それは力強きたふ所。かゞすがの温慢がうかんでこ来る。

——おゝ、母よ、母よ

——御身の、みはるをこにある？

母は次人に息子の心中を推測し得ない。或る日息子の決意を聴さう聚とくる。既刊の「科學者の実験」を読んでゐる間、その業子夜間健康を持つ事を驚嘆して、「科學者の手に握つて